様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３３９１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００５３６

研究課題名（和文）日独越境文学の比較研究

研究課題名（英文）Comparative Study of Japanese and German Transnational Literature

研究代表者
土屋　勝彦（Tsuchiya, Masahiko）

名古屋学院大学・国際文化学部・その他

研究者番号：９０１３５２７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：日独越境文学の共通する特質として、複数文化の相互影響作用による言語表現の豊饒性と新奇性、語りの複層性、多様性、多文化性など、さらにアイデンティティの移動と複数性が確認できる。両者の差異としては、他者性と異邦性、疎外と政治性の強度の違いが見られる。その背景には、難民や亡命者として移住せざるを得なかった作家たちと、自由意思で異国に潜入した作家たちとの違いにも起因するだろう。前者においては、戦争や紛争のトラウマや　新天地における自己確立への強い意志に切実な実存的問題意識が見られるが、後者はむしろ翻訳や言語表現の可能性への強い関心が確認できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
越境文学の持つ言語表現の新奇性や豊饒性は文学創造の重要な契機となり得る。また差別や排除を無効化する多様性のある社会実現への動機づけとして、越境文学の果たしうる異種混交・多様性確保への志向と創造力を高く評価することができる。戦争や紛争、社会的分断の現状に抗う力のひとつとして、かつての亡命文学や反戦文学と並んで、越境文学の持ちうる対立解消への志向と他者への共感力の喚起は社会的な意義を持ちうる。本研究ではいくつかのシンポジウムを通して、越境文学の持ちうるインターカルチュラルな世界構築へのパトスと意義を共有可能な価値意識として認識できた。各国民文学のカノンや枠組みを相対化する複層的な視点も見出される。

研究成果の概要（英文）：As common characteristics of transnational literature in Japanese and in German, we can confirm the fertility and novelty of linguistic expression due to the interaction of multiple cultures, the multiple layers, diversity, and multiculturality of narratives, as well as the mobility and plurality of identities. Differences between the two groups can be seen in the intensity of otherness and heteronormativity, marginalization and politicization. This may be attributed to the difference between those writers who were forced to emigrate as refugees or exiles and those who infiltrated different languages and cultures of their own free will. In the former, the trauma of war and conflict and the strong will to establish oneself in a new land show a keen existential awareness, while in the latter, a strong interest in the possibilities of translation and linguistic expression can be confirmed.

研究分野：日独比較文学

キーワード：越境文学　比較文学　多言語性　アイデンティティ　エクソフォニー　コスモポリタニズム　翻訳論　他者性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学術的特色としては、個別的作家研究や移民文学研究の成果を踏まえつつ、中欧文化圏の越境作家に焦点を絞って、マイナー文学の定義を再検討する視点、また日独作品比較による東西文化交流・受容の視点からのインターカルチュラリティ研究への試みは、日欧の比較文化論的な視点から、現代の越境文学を取り巻く状況とその将来像を探求するという点において、従来の越境文学研究にはあまり見られない。当該作家たちの諸作品に通底する問題意識には、マイナー文学の再生とポストコロニアル理論の問い直しを含み、英文学や仏文学、独文学といった大文字の国民文学史のみならず、少数言語によるマイナー文学の再評価につながることが予想される。また国民文学の規範性への反抗と革新への可能性を探ることも可能だろう。そこから世界文学や国民文学の再構築を周縁から中心へと向かう志向としてとらえる一つの契機となれば、大いに意義のある課題となるだろう。

２．研究の目的

本研究はドイツ語圏越境作家たちと日本語圏越境作家たちの問題意識の共通性と差異を分析し、そこからインターカルチュラルな経験の実相を探求すること、また日独比較文化に寄与すること、さらにポストコロニアリズム文学理論やマイナー文学論、脱領域文学論、周縁の文学論などの知見を深めることを目的とする。東欧や南欧などからドイツ語圏に移住し、母語でない獲得言語で執筆する「移民作家」や「亡命作家」と、同様に欧米や中国から移住し日本語で執筆する「外国人作家」との比較考察により、欧米と日本における文化受容と言語革新の問題性も究明する。①当該作家たちの具体的作品分析を継続しつつ、比較の視点を「越境性」と「他者性」に据えて、それが従来論じられてきたような、ポストコロニアル的あるいはポストモダン的な視点と交差する様相とその特質を明らかにする。②東欧的なエトスと南欧的なエトスがドイツ語圏文化に及ぼす影響の様相と特徴を考察する。③汎ヨーロッパ主義的な文化観へ架橋する世界観を考究することで、インターカルチュラルな経験の実相とその文学様式を解明する。④日本語圏においては欧米や中国文化を背景とする作家たちの日本文化受容と衝突の相貌をインターカルチュラルな経験として分析する。以上４点から、マイナー言語とメジャー言語の相克と選択の問題、東欧文化や南欧文化の浸透と流入によるドイツ語圏文学の変容と発展、日本語文化圏におけるインターカルチュラリティの問題が今後の文学思潮に与える作用と効果、ポストコロニアル文学理論やポストモダン文学理論の新たな方向性、越境文学から世界文学への架橋の諸問題など、広範囲な問題系への糸口になるよう努めたい。

３．研究の方法

これまで日本語圏とドイツ語圏の越境作家・文学の比較研究はほとんど行われておらず、また日独作家たちの合同シンポジウムもあまり行われてこなかった。その意味でドイツ、オーストリア、スイス、日本の諸大学の文学研究者と、ドイツ語圏の越境作家たちと日本語圏の作家たちが一堂に会して、「移動するアイデンティティ」の主題のもとに、文化的越境の意義、現代文学における他者性、文化共存、多文化性、間文化性の問題をめぐって精力的に議

論する場を提供し、相互交流および意見交換を通じて新たなインターカルチュラルな文学観を開示し合うことが必要である。それによって現代文学および「国民文学」研究への新たな視座を獲得することを目指したい。

４．研究成果

2019 年度

日本独文学会の欧文特集号である「多和田葉子－エキソフォニーの詩学」を募集し、春期研究会でも多和田葉子シンポジウムを企画した。9 月にはベルリンとウィーン、チューリヒに出張し、Thomas Stangl, Lydia Mischkulnig, Ann Cotten, Ilma, Rakusa, Julya Rabinowich, Terezia Mora, Peter Rosei, Herbert Wimmer, Phillip Weiss といった作家たちと面談し、文学における多言語性や越境性、現実と虚構の交差性などに関して興味深い知見を得た。オーストリア現代文学ゼミナール招待作家として来日する Stangl とは打合せを行い、11 月にゼミを開催し、本務校の大学でも朗読会を行った。その際には Ann Cotten と Lina Bittner に発表依頼した。また 11 月末にはクルド人ドイツ語劇作家の Ibrahim Amir の講演会を行い、シリア難民問題を戯画化するドラマツルギーの意義について知見を得た。ウィーン大学の博士課程学生の Bittner とオーストリアのジャポニズムについて意見交換した。3 月に予定していたベルリン出張は、コロナウィルス感染症拡大のため、残念ながら中止せざるを得なかった。文学の多言語性については B.Siller, S.Vlasta 共編の Literarische (Mehr)Sprachreflexionen という研究書に、Ann Cotten との対話形式で執筆した。このようにドイツ語圏の越境文学研究についてはある程度促進できた。日本の越境文学研究については、多和田葉子に関して少し進展させることができた。

2020 年度

コロナ感染症拡大のため、外国出張や国内出張も控えざるを得ない状況となり、学会や研究会は主にオンラインで行った。まず 2020 年 11 月に日本独文学会秋季研究発表会においてシンポジウム「言葉を逍遥する詩人、多和田葉子の文学をめぐって」を行った。5 名の発表者により日独語作家である多和田葉子の文学をめぐって、翻訳論および自己翻訳の問題から演劇作品とパフォーマンス、さらに物語論および語り手論に至るまで、初期から最新作までの日独語諸作品を対象として、包括的かつ根源的な多和田文学の特質と方向について発表し、活発な討論を行った。最後に多和田氏も登場しコロナ問題の続く中での近況について語っていただいた。同じく 11 月にはハンガリー出身の越境作家テレツィア・モーラの作品翻訳出版を記念して東京ゲーテインスティテュート主催の自作朗読会を行い、著者および翻訳者との往復書簡もホームページ上で公開した。2021 年 3 月には日本独文学会機関誌『ドイツ文学』国際版 161 号において、「多和田葉子ーエクソフォニーの詩学」特集号を編纂し、多和田葉子の詩 1 篇、イルマ・ラクーザ、リディア・ミッシュクルニヒ、アン・コッテンという３名の越境作家のエッセイ、そして 4 名の研究者による論文を掲載することができた。異質なるものへの視線から言語変革と新たな表現へと邁進してきた作家の新たな相貌が明らかになった。また 2020 年 11 月のオーストリア現代文学ゼミナールはダニエル・ヴィッサーを招待作家として開催した。

2021 年度

新型コロナ感染症が収まらないため、国内外の出張を控えたが、その代わりにオンラインでの学会や研究会、朗読会、シンポジウムなどを行った。まず 2021 年 9 月 11、12 日に、5 名のドイツ語圏越境作家（レオポルト・フェダマイアー、アンネ・ヴェーバー、オルガ・マルティノヴァ、アン・コッテン、ゼ ントゥラン・ヴァラタラヤー）を迎えて、シンポジウム「移動するアイデンティティ」を開催した。複数の文化を背景にしながらドイツ語で創作する作家たちが、それぞれ報告と自作朗読をおこない、複数の文化にまたがる文学活動と自身のアイデンティティとの相関について議論した。このオンライン・シンポジウムは、ゲーテインスティテュート東京の後援により、日独同時通訳による両言語で放映され大きな反響を得た。12 月 5 日には、名古屋学院大学の公開シンポジウム「流動する民族社会と「国家」との相克」において、「ドイツ語圏越境作家における言語、民族、文化をめぐって」と題して講演し議論した。さらに 12 月 11，12 日には、ロシア出身のドイツ語圏越境作家であるユリア・ラビノヴィチを招待作家として、第 30 回オーストリア現代文学ゼミナールをオンラインで開催した。9 名の国内外の研究者による発表と作家の朗読およびインタヴューが行われ活発な議論となった。また 2022 年 2 月 18 日に、文藝春秋『文學界』の後援により、4 名の日本語圏越境作家（アーサー・ビナード、李琴峰、多和田葉子（ベルリン）、関口涼子（パリ））を迎えて越境文学シンポジウム「移動するアイデンティティ」を行った。司会を早稲田大学の松永美穂氏と土屋が務めた。日本独文学会誌のオーストリア文学特集号（欧文号）では、越境作家のレオポルト・フェダマイアーとアン・コッテンに論文執筆の依頼を行い、2022 年 3 月末無事刊行された。

2022 年度

新型コロナ感染症の収束が遅れたため国外の出張を控えたが、その代わりに国内あるいはオンラインでの学会や研究会、朗読会、シンポジウムを開催した。まず 6 月、津田塾大学言語文化研究所「世界文学の可能性」研究会において「もう一つのコスモポリタニズムのために―ドイツ語圏文学から世界文学へ」と題して講演した。10 月、名古屋学院大学にて、スリランカ出身のドイツ語作家セントゥラン・ヴァラタラジャの作品『赤（渇望）』朗読・対話会（主催：ゲーテ・インスティトゥート東京）を行った。11 月には、ヨーロッパ文芸フェスティバル 2022 の催しとして、ナターシャ・ヴォーディン『彼女はマリウポリからやってきた』の朗読＆トーク（主催：ゲーテインスティテュート東京）に参加・協力した。2023 年 2 月には、マリアナ・ガポネンコ（ウクライナ出身）、イリア・トロヤノフ（ブルガリア出身）、ウラジーミル・ヴェルトリプ（ロシア出身）という 3 名の越境作家とともに、オンライン・シンポジウム「移動するアイデンティティ―東欧出身のドイツ語圏越境作家たちとともに世界平和を願って」を開催し、その報告書を作成した。ヴァラタラジャー氏の作品『赤』は現代のカニバリズム的な事件をもとに神話的な世界と祈りの形式を持ち込む詩的作品である。ヴォーディン氏の作品は自殺した母親の足跡を辿りながら、戦前・戦後の家族史がヨーロッパの負の歴史（スターリン主義、飢饉、ナチズム、強制労働など）と重なる。シンポジウムは、ロシアによるウクライナ侵攻以後、文学の無力感と政治的有効性が問い直されるなか、文学の根源的、間接的な批判・表現力や真理への洞察力を再認識する場ともなった。東欧作家たちが体現する越境文学の持つパトスは、異文化間の創造的な対話を実現し、世界平和への願いとも合致するだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 アーサー・ビナード、関口涼子、多和田葉子、李琴峰（土屋勝彦、松永美穂）	４．巻 6月号
２．論文標題 シンポジウム「移動するアイデンティティ」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『文學界』	６．最初と最後の頁 170－182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土屋勝彦（編集・発行）	４．巻 なし
２．論文標題 国際シンポジウム「移動するアイデンティティ－東欧出身のドイツ語圏越境作家たちとともに世界平和を願って」報告書	５．発行年 2023年
３．雑誌名 科学研究費報告書	６．最初と最後の頁 全27頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土屋勝彦	４．巻 55号
２．論文標題 書評：多和田葉子『パウル・ツェランと中国の天使』（関口裕昭訳）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ドイツ文学研究	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土屋勝彦	４．巻 パンフレット
２．論文標題 ドイツ語圏越境文学の現在	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東京二期会オペラ劇場『こうもり』パンフレット（東京二期会発行）	６．最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masahiko TSUCHIYA	4．巻 161号
2．論文標題 Einleitung zum Sonderthema: Yoko Tawada - Poetologie der Exophonie	5．発行年 2021年
3．雑誌名 NEUE BEITRAEGE ZUR GERMANISTIK BAND 19 / HEFT 1 Internationale Ausgabe von JGG ;DOITSU BUNGAKU「ド イ ツ文学」 161	6．最初と最後の頁 10-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 土屋　勝彦	4．巻 947号
2．論文標題 多和田葉子の文学	5．発行年 2021年
3．雑誌名 学士会報	6．最初と最後の頁 50－53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Masahiko Tsuchiya, Lina Bittner	4．巻 31
2．論文標題 Japan-Erfahrungen in der oesterreichischen Literatur―Ein Gespraech mit Lina Bittner―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第31巻　第1号	6．最初と最後の頁 97-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15012/00001192	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Masahiko Tsuchiya, Lina Bittner	4．巻 31
2．論文標題 Artikel ueber Japonismus in Oesterreich von Lina Bittner	5．発行年 2019年
3．雑誌名 名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第31巻　第1号	6．最初と最後の頁 71-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15012/00001191	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土屋　勝彦	4．巻 31
2．論文標題 越境作家イブラヒム・アミールの朗読テクストについて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第31 巻　第2号	6．最初と最後の頁 97-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15012/00001248	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Leopold Federmair, Olga Marynova, Anne Weber, Senthuran Varatharaja, Ann Cottenh
2．発表標題 Literatur-Symposium: Identitaeten in Bewegung
3．学会等名 科研費シンポジウム　ゲーテインスティテュート東京の後援（企画・司会）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 土屋勝彦
2．発表標題 ドイツ語圏越境作家における言語、民族、文化をめぐって
3．学会等名 名古屋学院大学公開シンポジウム「流動する民族社会と「国家」との相克」（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 土屋勝彦、谷口幸代
2．発表標題 フォーラム　多和田葉子の演劇（谷口幸代氏との対談）
3．学会等名 京都芸術劇場 春秋座（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 M.Tsuchiya, Natalia Blum-Barth, Thomas Wallerberger u.a.
２．発表標題 ueber Julya Rabinowich
３．学会等名 Das 30. Seminar zur oesterreichischen Gegenwartsliteratur（企画と司会、議論）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 アーサー・ビナード、李琴峰、多和田葉子、関口涼子
２．発表標題 シンポジウム「移動するアイデンティティ」
３．学会等名 科研費シンポジウム　文藝春秋『文學界』の後援（企画と司会）松永美穂氏との共同司会
４．発表年 2022年

１．発表者名 土屋勝彦、齋藤由美子、谷本千沙、越川瑛理、谷口幸代、松永美穂
２．発表標題 シンポジウム「言葉を逍遥する詩人、多和田葉子の文学をめぐって」
３．学会等名 日本独文学会秋季研究発表会
４．発表年 2020年

１．発表者名 土屋勝彦
２．発表標題 神の背後にある世界　テレツィア・モーラとの対話
３．学会等名 ゲーテインスティテュート東京
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

1．著者名 鹿毛敏夫（編）、村井章介、土屋勝彦、吉田達矢、人見康弘、井上順孝、宮坂清、佐伯奈津子、黒柳志仁、メイヨー・クリストファー、今福龍太、梶原彩子	4．発行年 2021年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 224
3．書名 『交錯する宗教と民族』「ドイツ語圏越境作家における言語、民族、宗教について」	

1．著者名 土屋勝彦（編）齋藤由美子，谷本知沙，越川瑛理，谷口幸代，松永美穂	4．発行年 2021年
2．出版社 日本独文学会研究叢書　145号	5．総ページ数 71
3．書名 言語を逍遥する詩人 －多和田葉子の文学をめぐって－	

1．著者名 Barbara Siller, Sandra Vlasta, Masahiko Tsuchiya u.a.	4．発行年 2020年
2．出版社 Praesens Verlag	5．総ページ数 380
3．書名 Literarische (Mehr)Sprachreflexionen	

1．著者名 Barbara Siller, Sandra Vlasta, Masahiko Tsuchiya u.a.	4．発行年 2019年
2．出版社 Praesens Verlag	5．総ページ数 384
3．書名 Literarische (Mehr)Sprachreflexionen	

〔産業財産権〕

〔その他〕

30. Seminar zur oesterr. Gegenwartsliteratur
https://onsem.info/
Identitaeten in Bewegung
https://www.goethe.de/ins/jp/ja/sta/tok/ver.cfm?fuseaction=events.detail&event_id=22299645
越境文学シンポジウム「移動するアイデンティティ」
https://books.bunshun.jp/articles/-/6916
オーストリア現代文学ゼミナール
http://www.onsem.info/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Seminar zur oeserreichischen Gegenwartsliteratur	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関